

若手教員海外研修支援事業報告書(地域貢献との関わり)

氏 名	法文学部 准教授 鷗戸 聡
研修期間	2017年5月27日～2018年1月31日(鹿児島発～鹿児島着)
1. 教育研究機関	
国名及び滞在地名：	台湾 国 台南 市
機 関 名：	国立成功大学
2. 研修報告	
<p><u>研修題目</u>：台湾における母語運動の参与調査と地域間交流体制の構築</p> <p>大多数の台湾人にとっての「母語」は、対岸の福建地方の閩南語に様々な言語の影響が加わって成立したこの地域独特の言語「台湾語」であり、戦後になってから国民党政権が持ち込んだ中国語とは、英語とドイツ語よりも異なっていると言われる。80年代末の民主化以降、「中華民国」政府によって長らく抑圧されてきた「地域言語／母語」を復権させ、書記言語として整備し、教育や文芸創作で使用する動きが少しずつ推進されてきた。</p> <p>「地域貢献」を人文学的に考えていく時には、そもそも「地域」をどのように捉えるかという人々の意識の問題が重要となる。九州とほぼ同じ大きさの台湾は近年、中華人民共和国と差異化する形で地域の歴史とは何か、独自の文化とはどのようなものか探求してきた。全編空撮のドキュメンタリーが話題を呼ぶなど故郷の自然環境への関心も高まっている。本研修では、上述の母語運動について地域文化創生の観点から文学関連の研究を行なったが、地元の人々と親しく接する機会を得て、この「地域を意識すること」の有り様に触れることができたことが学術的な調査に勝る成果であった。また、現地滞在中に本学学生を迎えて台湾研修も実施し、地理的近縁性による近世以来の九州との交流、戦前の九州人の移住などについて説明しつつ、台湾の近現代史や社会的課題について学ぶ機会を設けたが、意識の高い現地の学生との交流から得るものが多かったようである。(「日本国」や「中華文明」といった)大きな物語に安易に回収されることなく自分たちの故郷をどのように認識するか、そのために必要な知識とは何か、ということを問う際に、台湾という鏡のような他者を媒介にして自らを見つめ直すことは、地域人材育成においても極めて有意義であることが確認できたと思う。帰国後も双方の学生の交換留学を進めており、研究と教育をリンクさせながら地域を意識する新たな視座を作り上げていきたい。</p>	